

# 戦時下国語教育実習一事例の考察

安 直 哉

## 一 はじめに

国語教育実習の歴史的研究はほとんどなされていない。その最大の理由は、記録資料が散逸していることにある。その中において、野地潤家は、自らの国語教育実習記録を保存し、公刊している。貴重な歴史的資料を提示してくれているのである。

本稿は、野地潤家の国語教育実習を検討することによって、戦時下国語教育実習の一端を解明することを目的とする。

野地潤家は、広島高等師範学校附属中学校で昭和十七年六月後半から七月初旬にかけて中学校教育実習を行っている。その間、合同批評授業を含めて、実地授業を八回実施している。氏は、実地授業のみにかかわらず、自らの教育実習に関係する様々な資料を残している。ただし、本稿では、実地授業の中の、「教案」と「授業批評」に絞って考察を進めることにする。第二章で「教案」の考察を、第三章で「授業批評」の考察をする。

## 二 教案の考察

### 二―一 「日本海海戦」の教案とその考察

「日本海海戦」は、東郷連合艦隊司令長官による戦闘報告である。二日間の渡る戦闘・戦勝の過程が詳細かつ格調高く綴られている。

野地潤家の教案は次の通りである。

「教材 国語巻三 一一 日本海海戦

教材観 日本海海戦の感激的戦況報告で、実に世界海戦史を飾る大文字である。繙く毎に、日本人の赤誠の至情をふつつと沸らせつつ、更に之を感激に溢れた至純の回想を貫いて、日本人の心情に次々と聖将東郷に生れしめてゆく教材と云へよう。

目的 節意・文意の深究を通して、聖将東郷の敬虔な至情に触れさせ、更に個々の生命に赤誠の聖火をあふれさせたい。

教順

一、通読一回（中略）

二、深究

節意の把握 本時の範囲を四節に分ち、一節宛表現面に注意を払ひつゝ、発問により或は範読を加へつゝ、内容の吟味・深究。

1 深究による板書機構（正面）

第一節（中略）

千載一隅の時機

我……肉薄襲撃

彼……四分五裂

血路を覓む

大混戦

烈しさ（中略）

第三節

総戦果……奇績

心にくさ（中略）

2 深究による板書機構（側面）

輯集 日没前に 一場の 俯角 汲々 戦場掃除 隻影 役務 人為

(1)

祖国も

三、通読 整理読である。(中略)

四、準備 日本海々戦経過要図 一枚(野地潤家(一九八一)四五頁)

「教材観」や「目的」は内容重視の国語教育観に立っている。しかし、「教順」を見ると、(右記引用文では大部分を省略してしまったが)キーワードの板書を軸とした「深究」の段階を中心として、語彙や表現に着目させようとしていることがわかる。

語彙や表現の指導を中心とし、必要以上に思想感化に流れてはいない。そういった点で、当時の時代背景の限定はあるものの、その範囲内において、公正な授業を行ったことがうかがえる。

また、「通読」を最初と最後に設定しているところなどは、芦田恵之助の教授過程の影響も見て取れる。

### 二二二 「東郷元帥と乃木大将」の教案とその考察

「東郷元帥と乃木大将」は、両軍人の伝記と逸話をまとめた文章教材である。

野地潤家の教案は次の通りである。

「題目 国語巻三 一二 東郷元帥と乃木大将(中略)」

教材観 両将が、その自然的性情を異にしても、深く美しい因縁に結ばれて、共に生涯至誠一貫、最も高き意味に於ける武士道の完成者であつたことを叙し、と共に永遠の国民的英雄であることを讃したものである。行文も平明、よく所期を尽くしてゐる。

目的 両将を結ぶ意味深き「と」(因縁)に眼を注がせつゝ、共に国民的英雄であつた所以を知らせ、その至誠一貫の生涯を深く回想敬慕することによつて、無限の感激に浸らせ、更にその胸裡の至誠を呼びさましたい。

時間配当 本時第一次

教授過程

(1)

一、両将を結ぶ「と」に着眼させ、語句の読みに注意を払ひつゝ、通読一回。九人。

二、主題把握。

三、本時の範囲(中略)を通読させ、節意把握をさせる。

四、範読発問を交へつゝ、文脈・表現面に即しつつ深究。

五、整理読一回、三人。(中略)

(2) 板書機構(その一)

東郷元帥④乃木大将

主題 至誠一貫の両将が共に国民的英雄である所以。

節意

一、共に国民的英雄

任務——国運を担ふ(以下略)(野地潤家(一九八一)五六頁)

ここで注目したいのは、「と」が強調されていることである。野地潤家は次のように述べている。

「教案(前掲)の「目的」の条に、「両将を結ぶ意味深き『と』(因縁)に眼を注がせつゝ」としており、また「教授過程」において、「一、両将を結ぶ『と』に着眼させ、」と述べているのは、当時すでに親しんでいた、垣内松三先生の「国語教授の批判と内省」(中略)に収めてある、「純粹なる『と』を求めて」という論考に触発されてのことである。」(野地潤家(一九八一)六六頁)

このように、当時、垣内学説の影響を受けていたことを、野地潤家自身が証言している。

垣内松三は『国語教授の批判と内省』の中で次のように述べている。

『読方と綴方』といふ五文字の外に何もありません。しかしもし『と』に注意して読むと、三通りの意味が見つかる。

まづ『と』によりてその表題を分けて見ると『読方』と『綴方』の二要素の外に、それを連結する『と』を加へて三要素に分析することができます。かうした読方から見た表題は、現在の国語教育の實際を象徴する姿とも謂つてよい。

併しながらこの表題の文字から見出された三要素は、リットカートのいはゆる「対象前的事物」であるといはねばなりません。研究の対象にまで高められない「原現象」であるといはねばなりません。それ故にそれ等の

要素を結びつける心もちをもって、この表題を読むとしたら『と』の内面に於て、新しい意味が見出されなければならないと思ひます。そして直ちに『と』を「要素の相關者と考へられることと思ひます。然るにそれを国語教育の實際を象徴する辞として見ると、もう両者の関係が稀薄なものとなつてしまふ。」(垣内松三(一九二七)四十五頁)

垣内松三が「と」に込めた主張の所在は、主に読方と綴方との相互依存的教育という部面にある。その意味からいえば、野地潤家の発想は、垣内松三の思想の拡大解釈という感も否めない。

しかし、重要なのは、教育実習生という若い実践者が、先端的な理論を実行することに対して、実習校が寛容であったという事実である。

飛田多喜雄は『国語教育方法論史』の「昭和十年代の教育思潮」の中で次のように書いている。

「教育の面でも人格教育説、文化教育説など哲学的・思弁的なものとしてしりぞけられ、教育勅語の精神が唯一絶対なものとして支持され、あらゆる教育上の方策は国家主義の方針によって強化されたのである。」(飛田多喜雄(一九六五)二一九頁)

人格教育説、文化教育説などは退けられたのであろう。しかし、垣内学説も多分に哲学的深遠さを有している。決してすべての「哲学的・思弁的なもの」が教育の場から排除されたわけではなかったことが、野地潤家の実践からはわかってくる。ただし、そこには野地潤家という、国語教育関連文献を広範に読破した若者の個性の存在が不可欠であった。

### 二二三 作文「表現」の教案とその考察

「表現」とは、広島高等師範学校附属中学校国語漢文研究会編『新作文』に掲載されていた教材である。様々な表現技法が概説され、そのうえで、夏目漱石等の名文が掲げられている。

野地潤家の教案は次の通りである。

#### 「題目 新作文 中 四 表現

教材観 文章の使命達成の立場から、表現の問題を考察し、表現法の大要に及んだものである。説明簡潔、例文も平明であり妥当的確である。

目的 文章の使命達成に於ける表現の重要性に眼を注がせ、殊に力強い表現の源は力強い感動にあることを認識させ、併せて表現法の大要を、興味を感じさせつつ会得させる。

時間配当 一時間

教授過程

(1)

- 一、(中略) 催促状によつて、文章の使命及び表現の三方面を考察させ、力強い表現に及ぶ。
- 二、力強い表現の例として志士平野国臣の歌をあげ、力強い表現の源は力強い感動にあることを認識させる。
- 三、文は作るものでなく、生れるものであること、即ち自然であるべき事を説き、しかもその中に自らなる表現法のある事を明らかにし、その必要を説く。
- 四、読み一回(中略)
- 五、例を示し、或は発問により、或は読み加へつゝ、表現法の大要を説明して理解させる。
- 六、例文を読ませる。

### 2 板書機構

表現

#### 一、文章の使命

文字・考・感じ・表現

要件

- 1 わかる表現——明瞭
- 2 正しい表現——正確
- 3 力強い表現——遒勁

#### 二、力強い表現

- 1 平野国臣  
わが胸の燃ゆる思ひにくらぶれば煙はうすし 桜島山
- 2 詩は英雄のわざである。
- 3 力強い感動——源

←

### 三表現法

⊗作るものでなく、生れるものである。

不自然——自然

1 比喩 直喩  
 隱喩  
 擬人法

独特的確

(以下略) (野地潤家(一九八二)七〇—七二頁)

「作文」の源に「感動」があることが強調されている。素朴な指導観ではある。しかし、時の戦時下になっても、時流に流されている側面は比較的少ない。「感動」を全面に打ち出す姿勢からは、熱血的な若い教師の初々しささえ読み取れる。

#### 二一四 「心の小径」の教案とその考察

「心の小径」は金田一京助のアイヌ語調査の逸話を描いた随筆である。

この教材に対する、野地潤家の教案は次の通りである。

「題目 国語巻三 一四 心の小径 金田一京助 (中略)

教材観 作者独特の貴重な体験を、克明巧妙な描写と簡潔遒勁な説明とによつて生かし、心の小径(言葉)の有する意義と価値とを興味と感銘との中に暗示する国民的文化的教材である。文章も亦独特で、示唆が多い。「大和言葉」とは内容に於て相通じ、次課「焚火」とは文体に於て相対照する所が見られる。

目的 この作者の独特な文章表現即ちその説明と描写とに即して、作者の意図する所を知らしめ、更にこれを礎として心の小径(言葉)の意義と価値とを感得させる。

時間配当 本時第一時

教授過程

(一)通読(中略)

(2)冒頭の結び「——だった。」が新しい表現であることを発見させ、本文の説明法の特徴を指導的発問により把握させる。(中略)

(3)説明と説明との間に、特異な描写のあることを発見させる。

(4)説明法の特徴の発見より、文の中心眼目を把握する示唆を与へ、或は之

を発表させる。又作者の重視してゐる方向を把握させる。

(5)範読一回。部分読。この際、描写法の特徴に眼を注がせる。

(6)描写につき、生徒の最上とするものより深究。「焚火」との比較を暗示する。

(7)整理読 一回(中略)

(一)板書機構(その一)

心の小径

(一)動機の説明

——頃、

——頃だった。

——のである。

(二)(中略)到着までの説明

——ことである。

——であつた。

——のである。

(三)一日目の説明(描写)

——存在だった。

(描写)

——のである。

(描写)

(四)四日目の描写(説明)

(——事だった。)

描写

(——は、——からである。)

描写(以下略) (野地潤家(一九八二)八一—八二頁)

この教案からは、文末表現に着目した授業が想像できる。文末表現も、表現法の一つである。野地潤家が、教育実習生時代、比較的、表現を重視した国語教育観を有していたことがわかる。

#### 二一五 「張儀連衡」の教案とその考察

「張儀連衡」は、張儀の活躍等を描いた漢文教材である。

野地潤家の教案は次の通りである。

「新訂漢文精選 卷一 十八 張儀連衡 (中略)

教材観 前課「蘇秦、合従」と共に、戦国乱世に於ける縦横両家の活躍と(合従)連衡策の大要を史実に即して述べたものである。之を味読する時、戦国乱離の世相と道義頹廢の諸相とが自ら痛切に迫り来り、各自の胸中に深く感銘する好教材である。

目的 熟読により史実に即して、忠実に行文の表現を追求し、戦国乱離の世相と道義の頹廢とを感銘せしめ、進んで、張儀の連衡策を中心とする活躍を通して、道義心の涵養を期したい。

時間配当 一時間

教授過程 (中略)

(1) 一、前時の復習反省を意図して、前課指名読一回二人。

二、本課指名読二回 (中略)

三、範読一回

四、構想の探究

五、範読並びに発問により各節の内容表現の深究。

六、整理読一回、一名。

(2) 板書機構 (中略) (野地潤家 (一九八二) 九〇頁)

右引用文の「目的」の中に、「忠実に行文の表現を追求し、」と書いてある。漢文においても、表現の読み取りを強調している。ここからも、野地潤家の表現重視の国語教育観の一端が読み取れる。

## 二一六 「平家の都落」の教案とその考察

『平家物語』からの教材である。平家の都落にあたって、福原の旧都での一夜を描いている場面である。

野地潤家の教案は次の通りである。

「題目 国語 卷七 九 平家物語 (中略)

教材観 落寞たる寿永の秋を背景にして、空しく都を落ち漂泊滅亡の一路を辿った平家一門の哀史は、この一文にその一面を躍如たらしめてゐる。

一大叙事詩としての平家物語に親しませ、更にその時代精神に触れさせるには恰好の教材である。

目的 読みの習熟によつて、流麗適勁の文章表現に親しませ、この都落の叙事の中に流れる漂泊流離感に浸らせ、併せて作者の用意深さに触れさせたい。

時間配当 二時間 本時 第二次

教授過程

(1) 一、指名読 (中略)

二、指導的発問により構想の吟味。

三、各節通釈並びに深究。

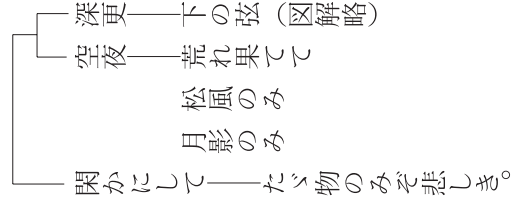
四、作者の用意深さについて研究。

五、整理読 一回。

(2) 板書機構 (その一)

平家の都落

(一) 福原の一夜



(二) 西海への漂泊

1 哀傷の景観

2 漂泊流離

3 都への思慕

(三) 結び

落寞たり寿永の秋

板書機構 (その二)

(1) 主上 海土 蟋蟀のきりぎりす 夕霧 海上 半天 餘所

(2) 里内裏 すだく 極浦 言問ひけん にやぬ

(3) 作者の用意 (野地潤家 (一九八二) 二〇六―二〇七頁)

野地潤家は、特にこの教材を好んでいる。それは、自らの旧制中学生時代、国史において、「昨日は東関の麓に轡を並べて十萬余騎、」から末尾までの一節がケイ囲みで掲げられていて、愛誦したおぼえがあった。わたくしは、この一節には、かねて心魅かれるものがある（野地潤家（一九八一）二〇六頁）ったという経緯による。

慣れ親しんだ事柄を教えるということが、特に実践初心者である教育実習生には有効に働くことが、ここからはわかってくる。

### 二一七 「習字」の略案とその考察

習字の実地授業を積極的に担当している。

野地潤家の略案は次のようであった。

#### 「習字」略案

##### 一、稽古

生涯稽古に御座候

##### 二、苦心

井上先生の苦心

お——床の間が一杯になった。大型のマッチばこが二つ。

##### 三、覚悟——一期一会

一日一枚——

##### 四、持統——書簡

朴骨庵 小川利雄

電報のやうな手紙をかく。

○悠然と西すごめん

○バンザイ アカメシダ

○着物をうらがへしにする男だ。

しかしたんすをまかせられる男だ。

○巻紙にちやんとかく。

##### 五、呀え（野地潤家（一九八一）九六—九七頁）

野地潤家は、右を教案とは呼ばずに、「略案」と記し、「教案のおぼえがき」（野地潤家（一九八一）九六頁）といっている。覚書である限り、本

人がわかればよいとも言えるが、この略案から授業の姿はなかなか見えてこない。野地潤家も、習字の授業は試行錯誤をしたことがうかがえる。その理由はいろいろと想像できるが、野地自身の次の言葉が最大の要因を示唆している。

「むしろ、生徒たちのほうが指導者のわたくしの書く字よりも、美しくきれいに書いた。」（野地潤家（一九八一）九七頁）

「実技がまずいという致命的な弱さがある」（野地潤家（一九八一）九七頁）

自分の習字の技能の弱さが、授業への自信の無さへと繋がり、そこから、授業展開も萎縮してしまったことが付度できる。

### 二一八 合同批評授業（漢詩）の教案とその考察

野地潤家は、最後に合同批評授業に臨んだ。今日でいう「研究授業」に相当するであろう。

教材は、頼山陽「下筑後河過菊池正観公戦処感而有作」だった。

菊池一族の戦いに思いをはせた長詩である。

野地潤家の教案は次のようであった。

#### 「第四学年南組漢文科教授案

教授者 野地潤家

日時 昭和十七年七月三日（金） 第四時限（中略）

教材 新訂漢文精選 卷三 二一 下筑後河、過菊池正観公戦処、感而有作

教材観 真冬の筑水肥嶺を前景・背景縦横に駆使して、菊池正観公の血戦とその一族の全節とを、胸灼けつくばかりの感激を以て詠まれたものである。構想雄大、論議烈々、古来山陽先生傑作中の傑作と称せられ、景情一致、真に天衣無縫の趣がある。時下、最も好ましい国民的教材たるを失はぬ。

目的 詩意に即した朗読を完成させ、この詩の天衣無縫なる所以を味はひつゝ、烈々たる勤王全節の心を昂揚させたい。

時間配当 一時間

教授過程

(1) 指名読 (三回) 誤読訂正並びに難語句指導。形態・構想に関する簡単な取扱ひ。範読 (一回) 斉読 (一回)

(2) 深究

I、構想の吟味 筑後河を髮髯させ、作者の心情の流れを把握させる。叙景・叙事・感想の交錯せることを知らしめ、之を整理させる。

II、指名読 (一回) 主想の把握。

III、節毎に叙述表現の深究並びに通解。第五節の取扱ひに際し、「練習二」を利用する。

(3) 整理読 (一回) (野地潤家 (一九八一) 一〇六一—一〇七頁)

音読を中心とした授業過程である。漢詩の基本は音読にあるという、従来の漢文教授の伝統に則った授業である。その意味では、当時として穏当な授業と言えよう。

以上七例の教案と一例の略案から、野地潤家の教育実習の授業をまとめて推察する。総合的に言えば、時代の要請を受けた皇国民的心性の涵養を目的にしながらも、その指導過程においては、文章表現の吟味を重視している。また、垣内学説等の学的動向も旺盛に摂取し、独自の観点を打ち出そうとする意欲も覗かせている。その結果、教育実習生としては、高いレベルの授業構想を提案することができたと評価できる。

### 三 授業批評の考察

野地潤家は、自らの授業に対する参観者の批評も克明に記録している。これらの授業批評から、当時の教師は、教育実習生にどのような力量の補強を求めていたのかを考察していく。

#### 三十一 「日本海海戦」の授業批評とその考察

この授業では岡本明と指導教官小谷等から批評を受けている。

両者が指摘しているのは板書である。小谷は「板書の乱暴」、岡本は「板書のしかた、」と述べている。教育実習生は、学生であるため、それま

で板書という活動をする機会が少ない。そのため、板書には不慣れである。その点の改善を求められている。

また、授業全体の流れの不自然さも指摘されている。小谷は「教授の徹底——リズムを生かす」、岡本は「調子。ひきずりすぎてはいかぬ。」と述べている。ベテランから見ると、授業の生硬さを感じたのであろう。この点は、岡本の「きれいにやることは、必ずしもいいことではない。「きれいな授業をするな。かへつて生徒に徹底せぬ。」との指導からもうかがえる。しかし、これは教育実習生にとっては難しい課題であったと思われる。

#### 三十二 「東郷元帥と乃木大将」の授業批評とその考察

この授業に対しては、教育実習生および小谷等から批評を受けている。

その批評の中には、「構文にとらはれすぎる。」という指摘と「文をはなれすぎる。」という、相反する批評がされている。参観者の国語教育観によって、同じ授業を見てもまったく反対の意見が出る。しかしこれを授業批評の未発達と批判する必要はない。むしろ、広島高等師範学校附属中学校は、多様な国語教育観を受け入れる許容の広さを有していたと解すべきである。

「教授法がつまりすぎる。」という批評も残されている。これは教育実習生にとっては名誉な批評である。野地潤家が、一定水準の教授法を身につけてから教育実習に臨んだことがわかる。逆に言えば、他の教育実習生の教授法は、やはり当然のことながら未熟であったのであろう。

「型をやぶれ。」という批評もされている。この授業準備において、垣内学説を導入したことは本稿第二章第二節でも触れたが、そのために、垣内学説の解釈に引きずられて、授業が硬直化した可能性が考えられる。新しい学説を取り入れようという進取の気性は、教育実習生としても評価されるのであろう。しかし、それを授業実践のなかでこなれたものするには、まだ経験不足だったのであろう。

#### 三十三 作文「表現」の授業批評とその考察

この授業に対しても、教育実習生および小谷等から批評を受けている。野地潤家は、「こちらから与える傾向が強く、生徒から引き出してくることが少なかった。その点について、生徒に発見させるようにと指摘された。」(野地潤家(一九八一)七六頁)と回想している。注入重視を脱して、開発を重視せよとの指摘である。注入重視という立場も、授業目標の達成に躍起になっている教育実習生には、陥りやすい傾向だったと思われる。

また、「一応の工夫を尽くして、教案をまとめ、授業に臨んでも、小さくまとまって、ある「型」にはまったものになってしまう。――この点を鋭く指摘されたのであった。「型」にはまることなく、独自の考案・工夫をしていくようにたえず求められた。」(野地潤家(一九八一)七六頁)とも述懐している。「型」を形成することできえ、教育実習生には難儀な要求である。その「型」を教育実習生野地潤家は、すでに習得していた。そのうえで、今度はその「型」を脱することを目指している。高い到達目標を自覚した教育実習生の存在が認められる。

### 三十四 「心の小径」の授業批評とその考察

同授業に対する批評としては、「直観的に把握させようとする。」「直観的には把握されてゐる」という類が目だつ。ここからも、垣内学説を授業に導入した形跡が見て取れる。ただ、「秩序が立つ。」という批評から、そうした授業を上手に行おうとする意識が過度に際立ってしまう点も、察せられる。

「硬化」「かたい。」「強引にひきずる。」という批評もなされている。前節の中で野地潤家の述懐として引用した、「型」にはまった授業から、なかなか抜け出せないでいる様子がわかる。

その一方、「迫力もましてきた。」という批評もある。しだいに授業に慣れてきた教育実習生の姿が読み取れる。

### 三十五 「張儀連衡」の授業批評とその考察

ここでも、次のような批評が出た。「終始おちついて自分の予定の案ををはりまでくつついて行った。」「板書

の文句に促はれるな。」(野地潤家(一九八一)九四頁)

これは同じ傾向を画面から見た批評である。板書機構を中心とした、予定した授業過程を、予定通りこなそうとする傾向である。授業では想定できないような反応も起こる。そうした事態が生じない場合は、教案通りの授業は成功に終わる。しかし、多くの授業では想定外の出来事が起こる。その場合の対応については、一抹の不安を感じさせる授業だったのであろう。

### 三十六 「平家の都落」の授業批評とその考察

この授業に対しては、教官の溝渕鉄夫が積極的な批評を行っている。古典語の知識の確認などが多く記されている。教官から見た場合、古典に対する知識の点で、教育実習生には未だ不安を感じるところが多いのがわかる。

### 三十七 「習字」の授業批評とその考察

この授業に関しては、小谷等から、「実地に模範を書いて示す必要のあること」を指摘されている。野地潤家も「文字を書いて見せた。」のではあるが、その一方で、「話すことに夢中になっていた。」とも述べている。習字のような実技の授業においては、実際に手本を書いて示すことが基本である。そうした基本に関しては、指導教官が的確に指摘していたことがわかる。

### 三十八 合同批評授業(漢詩)の授業批評とその考察

この授業は合同批評授業だったため、参観者も多く、教育実習生七名、教官五名からの批評が残されている。

教育実習生の批評と教官の批評を総合的に比較してみる。教育実習生の批評は、「一方的な授業。」というように授業全体の印象的批評が目立つ。それに対して教官の批評は、「重要語句の取扱ひ。」「重要語句を最初におさへる。」などの、部分部分をとらえた批評で構成されている。こうした違いがなぜ生じるのかは一概には言えないが、面白い傾向と思われる。



#### 四 まとめ

野地潤家は、「教育実習そのものは充実していた。」(野地潤家(一九八一)一頁)という。これは決して過言ではない。野地潤家の教育実習の資料を読むと、そこには綿密な準備のもと、初々しくも緻密な実践が展開されていたことがわかる。

「戦時下、実習期間はそれぞれ一五日ずつに短縮されていた。」(野地潤家(一九八一)三頁)という。今日、教育実習は標準的には四週間行われる。四週間じっくりと教育実習が受けられる今日の状況を幸せに思う。と同時に、戦時下においても、次世代を担う教師教育は厳しい指導のもとに確実に遂行されていたことを知ることができるのである。

#### 【引用文献】

- 垣内松三(一九二七)『国語教授の批判と内省』不老閣書房。  
野地潤家(一九八一)『国語教育実習个体史』溪水社。  
飛田多喜雄(一九六五)『国語教育方法論史』明治図書。

